

燎原の火の如く—明治20年代の教勢伸展—(その1)

教祖が現身をお隠しになった明治20年頃、天理教を信仰している人は何人位いたのだろうか。明確な資料はなく、推定するしかない。大雑把に言うとも数万人といったところだろうか。

明治20年より少し前から考えよう。

明治17年8月、教祖「御苦勞」の中、奈良監獄署からお帰りになるときのお迎えについて『稿本天理教教祖伝』には「全国からお迎えの人数は萬を以て数える程であったという」(274頁)とある。この記述にある数字はどう解釈できるのだろうか。「程であったという」から伝聞を記述したものである。つまりお迎えの人が1万人ほどであったと伝えられているのである。この頃の信者全体数は少なくとも1万人を越すほどであったと考えていいのではないか。

また現身をお隠しになる当日、明治20年陰曆正月26日は毎月の祭典日であり、『稿本天理教教祖伝』には「つとめの時刻には参拝人が非常に多く、その数は数千に達した」(330頁)と記されている。教祖のご葬祭に参集した信者数についても『稿本中山真之亮伝』の記述を借りれば「寄り集うた信者の面々は、無慮五万以上」(55頁)であったという。

これらの資料から総合的に判断するしかない。やはり「数万人」という曖昧な表現でしか書き表せないというところであろう。

ところがそれから10年後、明治29年末の信者統計が『道の友』(現『みちのとも』)明治30年2月号に載っている。そこにはなんと日本全国の天理教信者は313万人余だとされる。この統計には、全国各道府県ごとの信者数が明記され、その合計が313万人になっているのである。

この統計をそのまま理解すると、教祖が現身を隠されてから明治29年末までの10年間に何十倍、いやそれ以上の伸展をみたことになる。この頃、天理教に一体何が起こったのであろう。

明治20年頃、奈良県、大阪府内にはかなりの信仰者がいた。村々に、もしくは一人のリーダーを中心に、信仰集団としての講が数多く存在した。京都市内や京都府南部、阪神間にもいくらか信者がいただろう。三重県伊賀や和歌山県、滋賀県の一部、さらに静岡県、東京、徳島県鳴門等々にもいたはずである。しかし、奈良と大阪を除けば各地の信者はさほど多くない。

明治21年、教会本部が設置され教会制度が始まると各地に存在した講がそのまま、もしくはいくつか統合され教会本部の部属教会となっていく。

明治21年以降の教会設置数を挙げると次のようになる。

21年—2カ所(教会本部を含まず)、22年—11カ所、23年—14カ所、24年—23カ所、25年—143カ所、26年—158カ所、27年—196カ所、28年—383カ所、29年—418カ所(『第3回天理教統計年鑑別冊』)

明治29年末には1,348もの教会が日本中に誕生した。初めは近畿が中心であったが、やがて東海、関東、四国にも増え、さらに遠方にまで及び沖繩を除く46道府県に教会が設置される。

教祖は現身をお隠される前日「扉を開く…ころりと変わるで」(明治20年2月17日/陰曆正月25日)と飯降伊蔵の口を通して語られた。明治20年代の本教はまさにこのお言葉通り「燎

原の火の如く」伸び広がっていくのである。

急速に伸展する本教に対し、脅威を感じる人たちがいた。その多くは仏教者だった。明治23、24年ころから本教に対する攻撃的、批判的出版物が出始めるのも仏教者によるものである(明治23年『真理之裁判』、明治26年『天輪王辨妄』など)。自分たちの存在を脅かす者に反抗を加えるのは常套である。しかし、その方法、手段は公正なものでなくてはならない。現存する天理教攻撃書は根も葉もないことを作為的に書き連ねたものであると言っている。

中には、「天理教撲滅演説会」といった企画を天理教者の集う場所近くで催した(『天理教高安大教会史』)こともある。これは本教が世間の人たちの目を奪うほどの伸展を見せたことに対する危機感があったからに他ならない。

明治25年8月号『道の友』に本教信者数統計が初めて掲載される。その数117万人余。「其筋の取調により差出されたる(統計)」だという。

明治20年代後半には東北、北海道や九州などかなり遠方にまで布教師がおもむき、教会が設立される。対馬、奄美大島、小豆島などの島々も明治20年代に布教が開始された。

そして明治20年に数万人程度だった本教信者が前記の通り、明治29年末の統計では313万人余にまで伸展したのである。

ところで、この統計には沖繩の信者数も記載されている。はたして、こんなに早く沖繩に伝道した人があったのだろうか。

教史上、沖繩に本教が伝わるのは、おそらく明治40年以降である。沖繩で最も早く設立された教会は沖繩分教会と那覇分教会である。この2教会はいずれも明治40年以降の伝道による。したがって明治29年末、沖繩に信仰者は存在しないと考えるのが普通である。しかし『那覇分教会史』を見ると、鹿児島に住んでいた教会創立者(2代会長)が郷里である沖繩に布教した明治41年当時、すでに天理教の神様を祭った形跡があったという。もしそうなら、いったい誰がいつ頃、沖繩に布教したのだろうか。それからもう一つ、仮に鹿児島もしくは九州各地に住む沖繩県人が信者になっていたと推定するなら、『道の友』の沖繩県に信者がいたとの記録もあり得ないことではない。

明治29年末の日本総人口は約4,300万人であった。仮に313万人の天理教信者数を実数だとすると、日本人の7.3パーセントが信者だったことになる。

「燎原の火」とは誰にも止められないほどの強い勢いで燃え広がる火のことをいう。まさに明治20年代の本教はこの譬え通りの勢いで伸展した。いや、「燎原の火」の言葉以上のすさまじさだったと言えるのではないか。一般に火が燃え広がる場合、隣接する地域へ広がるが、本教の場合その勢いが強い「ばちばち」と火の粉が飛ぶように遠方へ伝道の火が飛び、短期間に遠くまで燃え広がっていった。これがいわゆる「遠隔地布教」と言われるものである。ない命をたすけられた人が布教師となり、ご恩報じに、おたすけのために遠方へ出かけていった。隣接地への布教はもちろん、猛烈な遠隔地布教が展開されたからこそ短期間に東北、北海道、九州にまで本教は伸展した。

(この項続く)